



国際シンポジウム参加記

て、作家の練りに練った文章を自己流に読み解くことに快感を覚えるほうである。考えてみればこの違和感は当然で、わたしが所属学科から代役に選ばれたのは専門分野からではなく、今年から交換留学生の担当を始めたからであった。

しかしそうした違和感も発表を聞いていくうちに消えていき、最後の発表者の能登正人先生（シンポジウムでの例に倣って敬称は「先生」で統一する）の、非文字文化は文字通り否定的に「文字文化ではないもの」と定義できるが、肯定的に定義するのは難しいという発言を聞いたとき、一瞬目の前に広大な沃野が開ける思いがした。わたしが見たあの沃野はおそらくわたしの誤解にもとづいたもので、非言語文化の領域と重なるものだったのだろう。非言語文化を言語によって分析すると、それはもう非言語文化としては消え失せてしまう。わたしはきっと音楽や絵画や民具や建築だけではなく広大な非言語文化全域（そういうものがあるとして）を言語による分析を経ずに、別のかたちで知として取り入れ、記憶し記録する方法があるのではないかとふと夢想したのだろう。「非文字」の意義領域は「非言語」を含みながらそれより広いので、「非文字」というのはそのパラドックス解除の可能性への誤解を招き入れながらもそれを回避する命名になっているのかもしれない。

今回のシンポジウムの趣旨には音声・図像・写真・映像・道具・建築物・匂い・味覚など文字で表現されない人間の観念・知識・行為などを総合的に体系化する方法を模索する（筆者要約）と記されている。またそうした非文字資料をプログラム拠点リーダーの福田アジオ先生は主催者挨拶で大きく図像・身体技法・環境景観の三つに分けて説明していたし、この説明は神奈川大学21世紀COEプログラムのホームページでもなされている。このなかで、匂いや味覚や身体技法のデータを収集し記録し分析するのは容易ではなさそうだが、例えば廣田律子先生は民俗芸能の身体技法の調査・分析に取り組んでいる

し（『非文字資料研究』no. 9, 2005.9）川田順造先生が基調講演で示唆し、高光敏先生が民具の面から報告したように、性交・分娩・排泄の身体技法の文化的相違も興味深い。またこうした取り組みとともに、収集したデータを保存し、それに関わる人材の養成もCOEプログラムの中に入っているが、その点に関して今回のシンポジウムでは白庚勝、ジュヌヴィエーヴ・ガロ、そしてすでに紹介した能登正人、各先生の発表があり、さらにアラン＝マルク・リュ先生、橋川俊忠先生のコメントを聞くことができた。

ただ、この種のシンポジウムではどうしても突っ込んだ深い討論が交わされることが少ない。わたしは最後の「総合討論」に欠席して、同時に開かれていた海外提携研究機関との関係に関する会議に出席していたので、「総合討論」で理論面でも実践面でもどれほど深い討論がなされたか知らないが、おそらく同時通訳を介しての1時間45分の討論では、どんなに時間を有効に活用してももっと時間をかけて論議したかったと思った人が多かったのではないだろうか。長い時間をかければいいというものでもないだろうが、その夜の懇親会の席上で「総合討論」コーディネーターの佐野賢治先生が「あんな難しいまとめは今までしたことがない」とおっしゃっていて、そのときの佐野先生の難しそうなお顔をよく覚えているが、残念ながらその内容は知らない。しかし、確かに難しかったらうと想像はできる。

一方わたしが出席した海外提携研究機関との関係に関する会議のほうは、ホームページのリンク、2週間の派遣・招聘期間の使い方、AAS・JSA・EAJSなど海外の学会への参加の可能性などの意見が出て、そして思いも寄らぬこのレポートの提出を課せられた。

最後になったが、シンポジウムを企画運営され、また懇親会でご馳走して下さった方々に記して感謝の意を表したい。諸先生の歓迎のお気持ちは暖かく、あの石狩鍋は懐かしかった。

歴史の復権と非文字資料

18世紀日本の人口が3千万人であったとすれば、18世紀の日本には3千万の歴史があるはずだと言えよう。いや、

許 南麟（カナダ プリティッシュコロンビア大学教授）

それだけではない。18世紀に生まれ世を去っていた人々のひとりひとりを考えると、その歴史は3千万をはるかに

越えるだろう。

しかし、文字資料で扱う歴史は3千万という数字に近づくことははじめから不可能である。大勢の人々の大事な人生と歴史は文字資料の沈黙の闇の中に消えていく。歴史という巨大な言説の荒波の前では日常のささやかな声などは聞こえない。政治史にしる、経済史にしる、文字資料の語る歴史には限界がある。

人々の奪われた歴史はどこで復権することができるか。今回神奈川大学21世紀COEプログラム第1回国際シンポジウム「非文字資料とはなにか 人類文化の記憶と記録」を参観しながら自分自身に投げかけた問いであった。それは、また今回のシンポジウムに寄せた期待でもあった。

「文化」を考える際に度々壁にぶつかるのは、資料の問題である。研究対象が現在のものだとすれば現地調査も可能だが、過去のものだったら、物語を書くつもりではない以上、資料はつねに大きな課題になる。その上、文字資料だけでは十分ではない。それより根本的な問題は、物足りないことをよく承知しながら、文字による「実証」以外にはあまり認めない歴史学者の偏執症である。文字がぼけているとその「実証」もぼけるはずなのに、そういう所は無視されがちである。これはある意味で歴史の横暴であると言えるかもしれない。

開かれた文化研究とはなにか。失われた人々の声と人生の業は復権できるだろうか。その可能性を考えながら、今回のシンポジウムを興味深く見詰めた。見捨てられたところに日を照らし、忘却されたところから文化の深さを見出し、文化研究の幅を広げてくれるのかもしれないという期待感に満ちた二日間であった。

川田順造氏の基調講演で披露された「文化の三角測量」に基づく労働作法の比較では、長い年月をかけて寄せた、身体表象に関する観察と研究なしには発見できない学問の面白さを見た。「記号と写実」のセッションでは、写真・絵図の語る社会史の裏面に何が潜んでいるかを示した一連の報告で、写真であっても、写っている「事実」は写る人とそれをみる人の作為に翻弄される「真実」の世界があることに目覚めた。「身体技法と祭祀芸能」のセッションでは、技法から技法へ、芸能から芸能へと世代を越え伝えてきた文化の豊かさの根強い伝統に気づかされ

た。そして、「民具と民俗技術」のセッションでは、自然と人間とのあいだに流れている知恵と生存の働きを学んだ。

文字資料がカバーできない、より広くて深い文化の流れを掴もうとする試みはまさに21世紀の学問に重要な貢献をすることは疑問の余地はないだろうと確信した。非文字資料という大洋に向けて踏み出した、胸いっぱいの一歩を感じた時間であった。

でも、たくさんの課題もいただいた。たとえば、川田順造氏の「総合された感覚としての、潔／不潔、浄／不浄の区別、反射的忌避感覚も、文化によって培われた、きわめて根の深いものである」という提言も、その中身を充てるためには、越えなければならない山も高いだろう。

潔／不潔、浄／不浄の問題は、感覚の次元に留まることでは決してない。その背後には思想・思惟もあり、偏見・差別もあり、ときには国家権力、集団暴力も横たえている。その意味で、これは個人の問題でもあり、全体の問題でもある。それゆえ、総合されたとしても、独立変数としての感覚はありえないだろう。長い年月を経て「総合された感覚」の表象としての潔／不潔、浄／不浄は、結局は歴史の産物である。

思惟と感覚・身体技法との相互作用は祭祀芸能にも課題は明瞭に顕している。どのような系統を経て伝えてきても、その技法の中心軸には思惟・認識、理解の存在がある。したがって、あまりたくさんの身体技法を拾い集めても、その中心軸に触れなくては、無意味の世界に落ちってしまうだろう。

民俗誌の資料の収集には限りがない。これに、人形の技法まで加えると、感覚・技法の世界には、空間的に、時間的に、その量において終りが無い。問題は、動作の収集・分類と同時にやらなければいけないのは、それらバラバラの現象を繋げる理論化の必要性であろう。表現、象徴、思惟は分離されない。

空いている穴を一つ一つ埋めていく作業のなかで、非文字資料は確かに光を与えてくれるに違いない。しかし、その資料の量は、想像をはるかに超える。今回のシンポジウムで、強く感じたのは、非文字資料の魔力に一方的に巻き込まれては、という警戒心であった。逆に文字資



国際シンポジウム参加記

料をもうまく利用して、非文字資料の意味化をさらに深めていかなくてはと思った。

しっかりした理論を土台にして、比較研究を進めなが

ら、非文字資料が主導権を握る文化理論を作り上げれば、失われた歴史の復権はある程度できるのではと思いながら会場を去った。

文化表現に対する理解

織田 順子 (ブラジル サンパウロ大学日本文化研究所所長)

この度、2005年11月に神奈川大学21世紀COEプログラム第1回国際シンポジウムに提携研究機関であるサンパウロ大学文学部附属日本文化研究所の代表として参加できたのは実に意義深いものでした。シンポジウムのテーマとなった「非文字資料の記録と体系」は、日本語学を専門とし、文学部日本語日本文学講座で常に文字・漢字のことを話し、学生たちに対する文章読解の練習に明け暮れる私には目新しいものでした。

今回のシンポジウムに参加して改めて思ったのは、文字や文章の読解を教えるにも、その表現の根底にある書き手の意志が、またその表現内容の根底に隠れている文化的要素がわかるようにならなければいけないということです。このような要素の理解や説明には、時として直感的な、経験などによる説明に頼ることがあり、より体

系的な理解があればと思うことがあります。やはりより多くの資料が体系化していれば、それらに対する認識も深まり、説明もしやすいということが言えます。

実際、サンパウロ大学文学部日本語日本文学講座を専攻とする学生の多くが、日本語にも興味はあるものの、日本の持つさまざまな文化表現に惹かれて入学するものが多く、文化理解の需要はこれからも高まる一方だと思われる。

こうした面を考えても、皆さまのお仕事はすばらしく、これからも積極的に学び取り、またご一緒に勉強をさせていただくためにも、これからのさらなるご活躍を期待するものです。

最後になりましたが、シンポジウムのときにお世話になった皆さまに心からの御礼の気持ちを表します。

海外提携研究機関代表者懇談会

国際シンポジウムには私どもの7提携研究機関の代表者を招聘し、参加していただきました。韓国の延世大学の代表が急遽参加できなくなったため、全機関の代表が揃うことはできませんでしたが、6機関の代表が参加しました。シンポジウムの2日目午後1時間30分にわたり、海外提携研究機関代表者懇談会を開催し、神奈川大学COEと各機関の連携だけでなく、各国の代表が神奈川大学を介して相互に知り合い、親しく懇談する機会にもなりました。懇談の中では神奈川大学21世紀COEプログラムの研究事業についての協力・共同の方法について議論し、また若手研究者の相互訪問についても種々の問題点も含む多くの意見と提案をいただきました。

(福田)

日時：11月27日(日) 15:10~16:45

出席者：<提携研究機関> 王勇(浙江大学)・王曉葵(中山大学)・陳勤建(華東師範大学)・村上史展(香港大学)・許南麟(プリティッシュコロンビア大学)・織田順子(サンパウロ大学)

<神奈川大学> 福田アジオ・中島三千男・橋川俊忠

- 主な懇談事項：1. 若手研究員交換事業について
 2. 提携研究機関との研究者交流について
 3. 提携研究機関との共同事業について

